

世界はみんなつながっている

～多文化共生と地域の未来～

はじめに

我が国においては、少子高齢化、人口の減少、地方における過疎化などにより、労働力不足が深刻化している。JICA緒方貞子平和開発研究所は、生産年齢人口が減少し続ける日本が国として成長していくには、日本人と外国人が共に社会を創っていくことが不可欠であるということを、データで示している。独立行政法人国際協力機構は、「2030/40年の外国人との共生社会の実現に向けた取り組み調査・研究報告書」（2022年）において、日本と、外国人労働者を送り出す国の人口動態と産業構造の変化、労働市場を予測し、2030年と2040年時点の日本における外国人の受け入れ人数などを試算している。例えば、香川県の2040年外国人労働者数（対生産年齢人口比率）は8～10%と予想されており、今後ますます地域に外国人の方々が增多することが想像できる。また一方で、全国で必要な外国人労働者674万人に対して42万人が不足するとも予測されており、外国人の方々が仕事をしたい国として日本を選ばないことも懸念されているのである。

小豆島町は、醤油や佃煮の工場が多く、そこで働く外国人技能実習生の方々と出会うことが増えた。他にもカフェやゲストハウス経営などビジネスを目的とした外国人移住者もいる。また2年連続で持続可能な観光地TOP100にも選ばれており、国内外を問わず観光客も多い。物だけでなく人のグローバル化が急速に進みつつある小豆島の子どもたちには、海外をもっと身近に感じ、日本（小豆島）を選んで来て頂いている外国人の方々と共に地域を盛り上げ、持続可能な社会にするために必要なことを考え行動できる力を育てたいと考える。

この教材の使い方・参加のルール

世界の様々な国には、どの国も例外なく魅力的な特色があり、そして解決することが困難な課題がある。特色や課題の全くない国は存在しない。本来、どちらが上とか下とかいったことは、国と国の間にはないはずである。あるとすればそれはGDPといった何かしら数値化されたもので比べているに過ぎない。子どもたちが、どの国に対しても偏見をもつことなく、興味をもって自分事と考えられるようにするために、最初にプラスの出会いができるように意識しながら授業をすすめる。今回はアフリカとのプラスの出会いとしてクラフト体験をすることにした。そして、自分（日本）と外国とのモノのつながりや、人のつながりについて考えることで、国と国は支え合っていること、また外国に渡った日本の人々から外国と交流することで新しい文化が生まれ地域が発展していくことに気付けるようにする。最後には、日本に新生活や仕事を求めて訪れる外国の人々が增多していることや、その人たちの気持ちを知ることで、自分たちにできることを考え、地域の外国の方々と交流する等の実践行動につながるようにする。

全体のねらい

外国のことを身近に感じ、日本とのつながりを知ることで、様々な国と共生することの重要性を感じ、これからの日本と外国の多文化共生社会について考え実践行動につなげる。

アクティビティ1 「アフリカを身近に！外国とのプラスの出会い」

●概要

アフリカ（ナミビア）のクイズに答えたり、たくさんあるアフリカ布の中から自分のお気に入りを選んでくるみボタンやしおりを作ったりすることで、遠いアフリカとプラスの出会いをして、身近に感じることができるようになる。

●ねらい

アフリカと日本の違いを知り、外国への興味・関心を高める。

●主な対象

小学生

●用意するもの

・クイズ資料（P69～71）：パワーポイントで投影、ワークシートを作成するなど対象や場面に応じて準備する。

※以下はいずれも人数、一人あたりの作成数などで量を検討する。

- ・アフリカ布のハギレ（インターネット等で購入可能）
- ・くるみボタン作成キット（100円ショップ等で購入可能）
- ・ヘアゴム等
- ・しおりの台紙（厚紙）
- ・しおり用の短いヒモ
- ・穴あけパンチ
- ・はさみ、糊：人数分（または班で共有する）

●所要時間

45分～

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1. アフリカに関するクイズを行う。 （P69～71参照）	「クイズ」「〇×クイズ」「写真クイズ」のクイズを行う。学年の実態、所要時間に合わせてこれらのクイズのうちから適宜問題を選んでよい。
2. 1. でアフリカ、ナミビアの概要を知った上で、アフリカ布でくるみボタンやしおりをつくる。 （しおり作成例） 厚紙に各自好きな絵（形）を書き、ハサミで切り取った状態にしてハギレを糊で貼っていく。両面に布を貼ったら、穴あけパンチで1か所穴を開け、ヒモを通す。	クラフトは自分が使っても、大切な人へのプレゼントにしてもいいことを伝え、対象に合わせてアフリカ布を選ぶように助言する。

ふり返し 友だちと作品を見せ合い、感想を交流する。	
---	--

クイズ

問 題	答 え
アフリカで知っている国をたくさんあげてみましょう。	ナミビア・南アフリカ・モロッコ…
アフリカは何カ国ありますか。地図で確かめてみましょう。	54カ国
アフリカの人口はどれぐらいでしょう。 ①約1億人 ②約5億人 ③約15億人	③約15億人
日本に暮らしているアフリカ人は何人ぐらいでしょう。自分の住んでいる市町の人口と比べてみよう。	約2万1000人
ナミビアはヨーロッパのある国のまちなみと似ています。それはどこでしょう。 ①イギリス ②スペイン ③ドイツ	③ドイツ（写真①参照）
日本がアフリカから輸入しているものはどんなものがあるでしょう。	レアメタル・シアバター・タコ・スイカ・オクラ・ゴマ・グレープフルーツ・ワイン・ガーベラ・チョコレート・コーヒー・ルイボスティ等
NHK紅白歌合戦で約8000万年前に誕生した世界最古の砂漠である「ナミブ砂漠」から生中継した歌手はだれでしょう。	MISIA（第63回NHK紅白歌合戦）
ナミブ砂漠の広さは日本のどこと同じぐらいでしょう。 ①小豆島 ②四国 ③九州 ④北海道 ⑤本州	④北海道
雨がほとんど降らないナミブ砂漠の横に何があるか、地図で確かめてみましょう。 ①山 ②川 ③海	③海
ナミブ砂漠の砂はどこからきたでしょう。 ①空から降ってきた ②海から流れてきた ③もともとそこにあった	②海から流れてきた
ナミブ砂漠はどうして赤いのでしょうか。 ①赤い絵の具がまざっている ②太陽で焼けた ③鉄分が入っている	③鉄分が入っている

○×クイズ

問 題	答 え (すべて○)
ナミブ砂漠は寒い。	○ 朝夕は冷え込んで10℃以下になることもある。(写真②参照)
ナミブ砂漠には10ヵ月以上水を飲まずに生きている動物がいる。	○ オリックス ナミビアの国章にも描かれている。(写真③参照)
ナミブ砂漠には緑色の葉をつけた元気な木がある。	○ 季節河川や地下水脈、霧から水分を得ている。(写真④参照)
ナミビアは太陽が東からのぼって北を通り西に下る。	○ 南半球のナミビアは太陽が北側を通る。(写真⑤参照) →ペットボトルの影とコンパスの向きを確認。影が南側にあり、太陽は北側にあることが分かる。
ナミビアの牡蠣はとても美味しい。	○ 大西洋で養殖された新鮮な牡蠣がレストランで食べられる。 (写真⑥参照)
ナミビアの小学校では4年生からすべての授業が英語で行われるようになる。	○ 3年生までは部族ごとの言語。学校では各部族の歌やダンスを披露する場があり、それぞれの文化が大切にされている。 (写真⑫参照)

写真クイズ (見本)

※写真データはウェブ上からダウンロードしてください。

問題

この中からナミビアの写真を選びましょう。(このとき、児童生徒に見せるのは写真のみ。
写真の下解説は補足説明のときに使う)

答え

すべてナミビアの写真



ドイツの植民地時代の建造物が多い。



朝夕は冷え込んで10℃以下になることもある。



オリックスが水を飲みに来ている。



ナミブ砂漠では木々を多く見ることができる。



日本は北側・ナミビアは南側に影ができる。



大西洋で養殖された牡蠣。新鮮で美味しい。



大西洋から赤いナミブ砂漠が見えている。



大西洋にフラミンゴの群れがいる。



ナミブ砂漠のロッジにあった太陽光発電設備。



日産の自動車が販売されている。



小学校には昼食などが買える売店がある。



学校では各民族の文化が大切にされている。



コーンロウとよばれる髪型が美しい。



街には分別できるおおきなゴミ箱がある。



ナミビアはまっすぐな道路が多い。



スーパーは日本の食材も売っている。



レストランには日本の醤油がある。



ナミビアの日本国大使公邸の入り口。



日本のODAの現場。(ウォルビスベイ港)



JICAのお米プロジェクトで作られている。

アクティビティ2 「もし今、鎖国をしたらどうなるの？私たちの身の回りの物はほとんど…」

●概要

アフリカや他の外国と日本の物のつながりについて知り、もし日本が外国との交流がなくなると私たちの日常生活はどうなるかを考えることで、他国との共生の大切さに気づけるようにする。

●ねらい

日本が外国と共生していくことの大切さに気づく。

●主な対象

小学生

●用意するもの

- ・『『生きる力』を育む国際理解教育実践資料集』『世界の現状と課題 第1節 グローバル化と相互依存② やってみよう！カード』（P74～75）：グループ数分（予め両面印刷をして切り離しておく）
- ・模造紙、ペン：グループ数分
- ※上記以外でも、学校図書館等で身近な物が輸入品であることが分かる資料を準備する。

●所要時間

45分

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
「アフリカと日本のつながりを考えよう」 1. P74～75のカードを各班に1セット配る。 2. 「私たちの身の回りの物で外国とつながっているものを予想しよう」 カードの中からアフリカとつながりのあるものを選び、どのようにつながっているのかをグループごとに意見を出し合う。 3. 意見交換が進んだところで、裏面を見ながら答え合わせをする。 4. 「日本が今、鎖国をしたらどうなるだろう？」 日本の輸入がストップしたら私の生活にどのような変化、問題が起こると思うか考え、グループごとに模造紙に派生図でまとめていく。	1班3人程度でグループを作っておく。イラスト面を上にして配布し、カード裏の文字の面（回答）は見ないで進めるよう解説する。 グループごとにできるだけ多くリストアップするように助言する。 グループで選択肢にない物が出たら空欄のカードに書いても良い。 そば・寿司・たたみ・ガラス・くつなど、日本の生活に特になじみ深いものがどこから来ているか、資料を提示しながら解説する。

5. 他のグループが書いた派生図を回し読みしながら考えを共有して、感想を伝え合う。	
ふり返し ふり返しカードを各自で書く。	



やってみよう!

※切り取って使うこともできます

下にある18品目は、私たち日本人におなじみのものばかりです。この中から、アフリカとつながりがあるものを選びましょう。空白の部分には、わたしたちの身近にあるもので、アフリカとつながりがあるものを考えて書きましょう。

たこ焼き	けいたい でん わ 携帯電話	か と せん こう 蚊取り線香	チョコレート (カカオ)
ゴマ	電気	イセエビ	ダイヤモンド
スシ(マグロ)	バラの花	ガソリン	バニラアイス
もも 桃のジャム	けしょうひん 化粧品	うなぎ	ゲーム機
プラチナの指輪	コーヒー		



考えてみよう!

上で選んだものが、どのようにアフリカとつながっているのかを考えて、自分の予想を書きましょう。それから、班ごとに意見を出し合い、考えをまとめましょう。



つながりを見てみよう

前のページにあったものは、アフリカとどのようなつながりがあるのか、下の表で確認してみましょう。つながりを確認しながら、地図帳で関連のある国の場所も探してみましょう。

チョコレート(カカオ) チョコレートの原料であるカカオの約76%は西アフリカに位置するガーナから輸入されており、他にもコートジボワール、ナイジェリアなどから輸入されています。	蚊取り線香 蚊取り線香に使われている除虫菊はケニアやタンザニアなどの東アフリカから輸入されています。	携帯電話 携帯電話などの精密機器にはレアメタルがたくさん用いられています。レアメタルの一つコバルトはコンゴ民主共和国やザンビアなどで採掘されています。	たこ焼き 日本で消費されるタコの約60%が北部アフリカに位置するモーリタニアやモロッコから輸入されています。
ダイヤモンド アフリカの南部はダイヤモンドの一大産出地であり、ボツワナ、コンゴ民主共和国、南アフリカ共和国などが有名です。	イセエビ 南アフリカ共和国（輸入額の10.4%）やナミビア（輸入額の9.6%）からイセエビを輸入しています。	電気 日本は天然ガスをナイジェリヤやエジプトから輸入しており、それらは火力発電の燃料として使われています。	ゴマ ゴマはアフリカ原産と言われており、多くがナイジェリヤやブルキナファソ、タンザニアなどのアフリカの国々から日本に輸入されています。
バニラアイス バニラの原料となるバニラビーンズの90%以上がマダガスカルから輸入されています。他にウガンダやセーシェルなどからも輸入されています。	ガソリン 日本は中東だけでなく、スーダンやチャドなどアフリカからも石油を輸入しています。	バラの花 日本はケニアやエチオピアからバラを輸入しています。ケニア産のバラが輸入バラの約20%を占めています。	スシ(マグロ) 寿司や刺身で使われているクロマグロは、北アフリカ（モロッコやアルジェリア、チュニジア）からも輸入されています。
ゲーム機 ゲーム機などにはタンタルというレアメタルが使われています。アフリカではエチオピア、ルワンダ、モザンビーク、コンゴ民主共和国などがタンタルの産出地です。	うなぎ 近年、日本近海ではウナギの稚魚の不漁が続いており、2012年にマダガスカルからアフリカ産ウナギの稚魚の輸入が開始されています。	化粧品 化粧品には粘り気を出すためにアラビアゴムが使われています。アラビアゴムの産地は、スーダン、チャド、マリ、セネガルなどが挙げられます。	桃のジャム 南アフリカ共和国から桃（輸入額の19.5%）やあんず（輸入額の10.7%）などの果実加工品を輸入しています。他にエジプトなどからもジャムを輸入しています。
		コーヒー アフリカのコーヒー生産国としては、タンザニアやエチオピア、ケニアが知られており、日本ではモカやキリマンジャロといった名前です。	プラチナの指輪 貴金属などによく使われているプラチナの約76%を南アフリカから輸入しています。他に産出国としてジンバブエなどが挙げられます。

出典：JICA「日本・途上国 相互依存度調査」
財務省「貿易統計」
外務省パンフレット「日本とアフリカ」

アクティビティ3 「外国へ渡った日本人のたち」

●概要

JICA海外移住資料館の資料によると、日本人の海外移住は、「1866年、江戸幕府が海外渡航禁止令（鎖国令）を廃止してから150年以上の歴史」があるとされている。遠く海をわたった日本人は、まったく異なる社会や文化の背景を持つ人々とともに、移住先国で新たな社会づくりに参加し、地域の社会・経済・文化の発展に大きく貢献してきた。このアクティビティではハワイに移住した日本人について考える。ここでは次のアクティビティにつなげるために厳しい差別の現実についてはふれず、言葉や文化が違うことによるプラス面とマイナス面について考え、共生の大切さに気づけるようにしたい。

●ねらい

相手の国の文化を尊重しながら共生することの大切さに気づく。

●主な対象

小学生

●用意するもの

- ・「海外移住資料館」のサイトなどから、以下に関連する画像、情報を予め収集しておく。
 - ・「海外移住の概況」
 - ・「移住奨励ポスター」
 - ・「ハワイ官約移民」
 - ・「七つ道具」
- ・動画「弁当からミックスプレートへ」 JICA横浜 海外移住資料館
<https://www.youtube.com/watch?v=IJY2NUlyyGc>
- ・写真21（P78）：投影の場合はデータ、写真を配布する場合はグループ数分印刷しておく。
- ・模造紙、マジック：グループ数分（ふせんを使っても良い）

●所要時間

45分

用語の解説

「日本人の海外移住」

日本人の海外移住が本格的に始まったのは、1885年ハワイ王国におけるサトウキビ・プランテーションでの就労である。その後、アメリカ合衆国、カナダといった北米への移住、そして1899年にはペルー、1908年にはブラジルへと広がった。そして、1924年にアメリカで日本人の入国が禁止されると、大きな流れが北米から南米へと移っていく。第二次世界大戦後にも約26万人が移住しており、最後の移民船につぼん丸は1973年2月に285名の移住者を乗せて横浜を出港している。

現在は全世界に380万人以上（2021年）の海外移住者や日系人がおり、そのうち220万人以上が中南米諸国に在住していると推定されている。また、かつて日本人が移住した国々から、その子孫である日系人とその家族を含めて約21万人（2017年）が、就労や勉学の目的で来日し、日本で生活している。

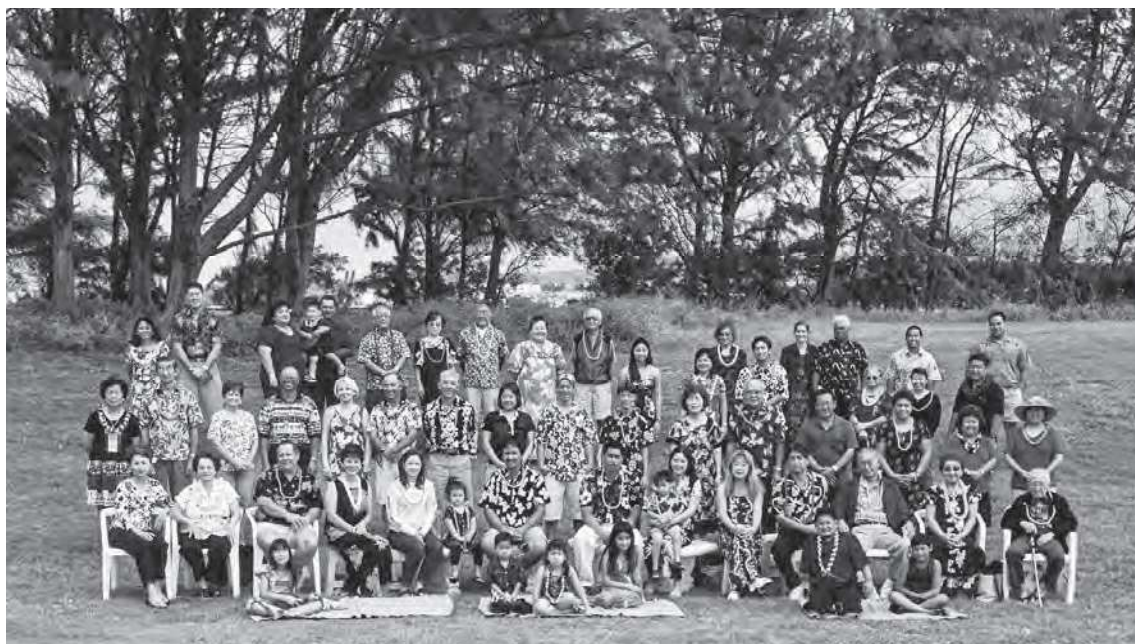
こうした経緯から、日本人の海外移住の歴史、そして移住者とその子孫である日系人について、広く一般の方々（とくに若い世代）に理解を深めてもらうことを目的として、海外移住資料館が開設されている。
(JICA横浜 海外移住資料館HP参照)

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1. 「ビッグファミリー」と題がついている写真②①を投影する。（または印刷した写真をグループに1枚ずつ配布する） 2. これに写っている人たちはどんな関係の人たちなのかを考える。 3. 「海外移住資料館」のサイトなどから、以下に関する資料を収集して提示、解説する。 「海外移住の概況」 「移住奨励ポスター」 「ハワイ官約移民」 「七つ道具」 4. 画像や情報を見ながら、移住した人々について考える。 5. 模造紙とペンを配る。 6. 「弁当からミックスプレートへ」の動画を見て、日本から外国へ移住した人々のプラス面とマイナス面をグループで考え、対比しながら模造紙に書き込む。  7. 他のグループが書いた内容を読んで、考えを共有し、感想を伝え合う。	1 グループ3人程度で考える。 助言、解説する内容についてはP76の「資料・解説」を参照。 海外移住した人数が全国で76万人もいたこと、移民県とよばれるほど移住した人が多い県があったことを解説。 現地での仕事の様子、日本を離れるときの持ち物などから当時の生活が想像できるようにする。 主に以下の点に気づけるようにしたい。 ・日本の「ふつう」は外国へ行くと個性となり、それがプラス面になることもある。 ・マイナス面は人権が守られないことで起きることが多い。 ・文化が組み合わさることで新しい文化が生まれ、よりよく発展していくことがある。
ふり返し ふり返しカードを書く。	

●資料・解説

※写真データはウェブ上からダウンロードしてください。



写真②「ビッグファミリー」

1891（明治24）年に山口県からハワイに移住した1組の夫婦の子孫の写真で、最初に移住した人の孫である日系三世から、さらにその三世のひ孫である六世まで写っており、家族が世代を重ねるごとに多様化してことがわかる。

アクティビティ4 「日本に渡ってきた外国の人たち」

●概要

日本の人口減少や外国人の人口の様子分かる資料を提示した後、アクティビティ3で作成した「日本から外国へ移住した人のプラス面とマイナス面」をふり返り、日本に住んでいる外国人の人権について考える。そして、外国人の方々が住みやすい町のイメージをふくらませ、そのために自分ができそうなことを考える事で実践行動につながるようにする。授業後には地域の外国人の方々との交流等が企画できるとよい。

●ねらい

日本に住む外国人の方々が感じていることを考え、どうすれば外国人との共生の社会を作っていくことができるかを考えることができる。

●主な対象

小学生

●用意するもの

- ・ 外国人人口などに関する資料（P80～81）：事前に投影できるよう準備する。
- ・ 外国人青年のポスター（P82）（姫路市教育委員会作成）
- ・ 模造紙、ペン：グループ数分（ふせん等を使っても良い）

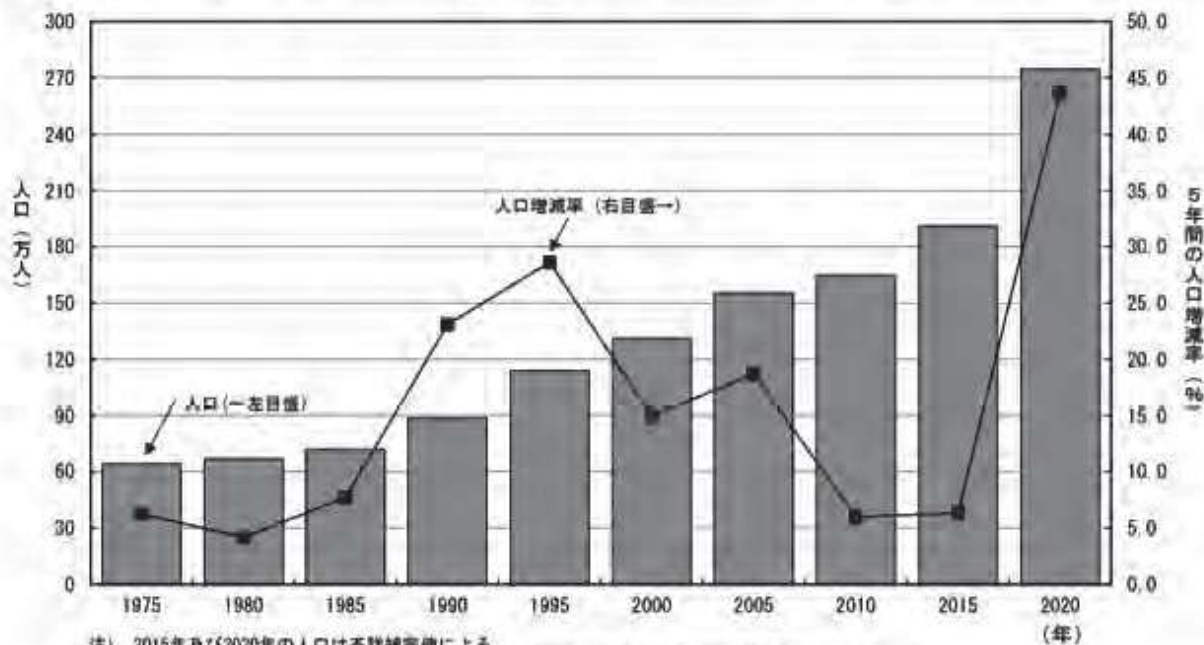
●所要時間

45分

●すすめ方

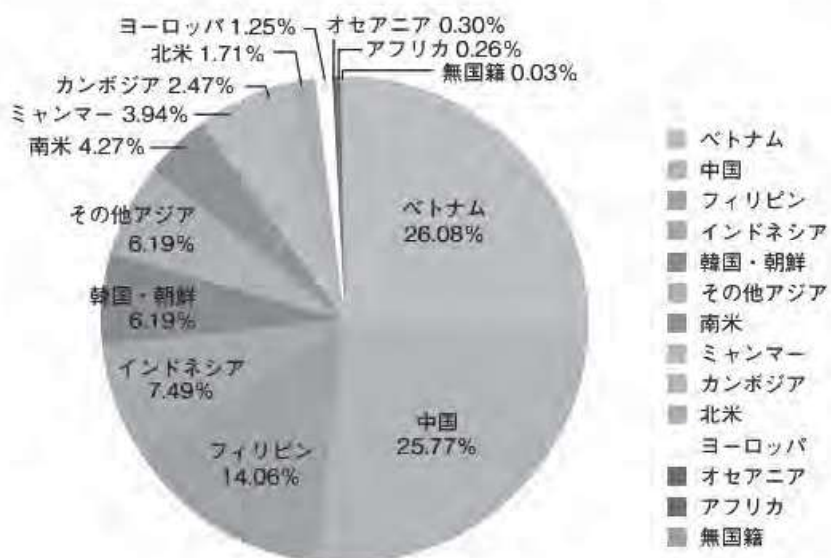
学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1. 外国人の人口に関する資料を提示した後、アクティビティ3で作成した「日本から外国へ移住した人のプラス面とマイナス面の対比」をふり返り、日本に来た外国人がどんなことを思っているのか考える。 2. 「外国人青年のポスター」を提示し、 にどんな言葉が入るかを考える。その後、 に入る言葉が「日本」であることを伝え、青年の気持ちを考える。 3. 「文化や言葉が違う人々にも住みやすい地域って、どんなところだろう？」 模造紙、ペンを配り、外国人にも住みやすい日本や地域になるために必要なことをグループで考え、派生図にまとめていく。 4. 他のグループが書いた派生図を読んで、考えを共有し、感想を伝え合う。	1 グループ3人程度で考える。 課題に連続性を持たせることができるため、アクティビティ3とセットで行うことが望ましい。 「 にいるほど、 が遠ざかっていく」という文の に身近な地名を入れることで、自分事として捉えられるようにする。 アクティビティ1－3をふり返りながら考える。
ふり返り ふり返りカードを書く。	

図Ⅳ－１－２ 外国人人口及び外国人人口増減率の推移（1975年～2020年）



出典：「Your News Online」より

国籍別在留外国人の構成比（令和2（2020）年末現在）



出典「在留外国人統計（法務省）」

県内在留外国人数と県人口の推移

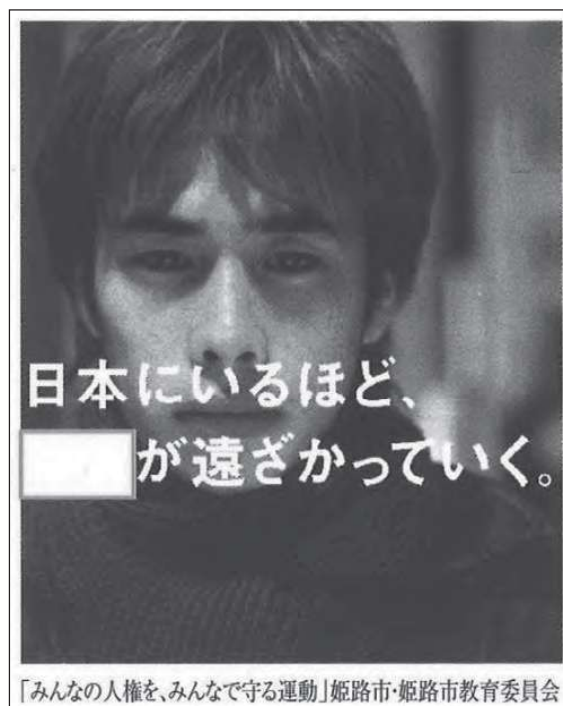


出典「在留外国人統計（法務省）」「香川県人口移動調査（統計調査課）」

在留外国人の市町人口に占める割合（令和2（2020）年末現在）

	人口（人）	在留外国人（人）	人口に占める 在留外国人の割合（％）	構成比の順位
高松市	417,803	5,191	1.24	10位
丸亀市	109,589	2,099	1.92	5位
坂出市	50,683	1,028	2.03	4位
善通寺市	31,643	288	0.91	14位
観音寺市	57,503	1,013	1.76	6位
さぬき市	47,043	439	0.93	13位
東かがわ市	28,300	280	0.99	12位
三豊市	61,917	1,056	1.71	7位
土庄町	12,856	89	0.69	17位
小豆島町	13,889	159	1.14	11位
三木町	26,925	243	0.90	15位
直島町	3,106	26	0.84	16位
宇多津町	18,704	501	2.68	2位
綾川町	22,714	365	1.61	8位
琴平町	8,476	184	2.17	3位
多度津町	22,459	987	4.39	1位
まんのう町	17,439	226	1.30	9位
	951,049	14,174		

出典「在留外国人統計（法務省）」「香川県人口移動調査（統計調査課）」



参考文献・引用資料

- ・「2030/40年の外国人との共生社会の実現に向けた取り組み 調査・研究報告書」JICA緒方貞子平和開発研究所、2022年
https://www.jica.go.jp/jica_ri/publication/booksandreports/20220331_01.html
- ・「よりよい未来をともに学び・ともに創るファシリテーターのための参加型アクティビティ集」特定非営利活動法人NIED・国際理解教育センター発行
- ・「日本とアフリカ」、外務省 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100498557.pdf>
- ・『『生きる力』を育む国際理解教育実践資料集』JICA地球ひろば発行、初版2013年10月
https://www.jica.go.jp/cooperation/learn/material/educational_practice.html
- ・「モノから知る日本と世界の結びつき」保岡孝之 監修、学研プラス、2006年
- ・JICA横浜 海外移住資料館 <https://www.jica.go.jp/domestic/jomm/outline/index.html>
- ・「弁当からミックスプレートへ」（アニメーション）
<https://www.youtube.com/watch?v=IJY2NUllyGc>
- ・外国人人口及び外国人人口増減率の推移（1975年～2020年）
<https://yournewsonline.net/articles/20211130-japan-population-national-census-2020/>
- ・「国際理解教育教材 世界の国を知る・世界の国から学ぶ『わたしたちの地球と未来』」愛知県国際交流協会
<https://www2.aia.pref.aichi.jp/koryu/j/kyouzai/index.html>
- ・「多文化共生のためのシティズンシップ教育実践ハンドブック」多文化共生のための市民性教育研究会 編著、明石書店、2020年
- ・「じんけんスキルブックⅢ」兵庫県人権教育研究協議会
- ・「ナミビアを知るための53章」水野一晴、永原陽子 編著、明石書店、2016年
- ・「在留外国人統計」法務省、2023年6月
- ・「香川県人口移動調査」統計調査課
- ・「多文化共生事業調査」香川県国際課
- ・人権啓発パネル（外国人青年のポスター画像）姫路市教育委員会

実践事例報告

プログラム作成・実践者

阪倉 順子

学校名

小豆島町立苗羽小学校

担当教科

社会

実践教科

単元名

6年社会「世界の中の日本、世界の未来と日本の役割」

3～6年「総合的な学習の時間・多文化共生」

【授業の概要】

(1) 対等な関係であるという学びから

教師海外研修へ行くにあたり、当初、私は無意識のうちに先進国の日本という立場からアフリカのナミビアを「課題が多い国」と見ていたように思う。しかし、研修を通して現地で国際協力活動を行っている日本の方々の姿勢を実際に見たことで、「国」に上や下といった関係などなく対等であること、違いを否定することなくそのまま受けとめることの大切さを学んだ。子どもたちには、国の違いは「特色」と捉え、どの国とも肯定的で身近に感じられるような出会いができるようにしたいと思った。

授業では、6年生社会「世界の中の日本」で教科書に例示されている国に加えて、アクティビティ1「アフリカを身近に！外国とのプラスの出会い」で「ナミビア」、月に1回来校するALTに「アメリカ」、小豆島在住の青年海外協力隊OVに「セネガル」「ボリビア」、1学期に体験入学していた6年生に「スペイン」（オンラインで交流）など、様々な国についてプラスの出会いを行った。よく知る人から外国のことを聞くことで、遠い外国を身近に感じ、興味・関心を高めることができた。（1～5年生はアクティビティ1のみ行った。）



(2) 外国から日本を見たことで、日本の課題が明確になったことから

日本は人口とともに労働力、そして税収も減っていくことが予想されている。食糧自給率も低く資源も少ない。貿易が滞ってしまうと、たちまち生活に困難が生じる。これらのことは、知識としては知っていたが、日々の生活の中で意識することはあまりなかった。

ナミビアでは、日本の生活では味わうことのない様々な不便さを体験したり、物が少なく学習用品等が不足する中での授業を見たり、ナミビアをはじめとしたアフリカから日本に輸出されている多くの物を知ったりしたことで、物流や貿易の重要性を実感した。更に、資源が少ない日本にとっての国際協力は他国支援だけを目的としているのではなく、より多くの国と良好な関係を築いておかねば生き残れないという、日本の厳しい現実への理解も深まり、これらをアクティビティ2に活かした。

授業は6年生総合的な学習の時間に行った。普段、意識せずに生活していると気付かないが、自分の身の回りの物をよく見ると、着ている服、持ち物、毎日食べている食事など、どれも外国から輸入されているものばかりであること、日本の文化ともいえる「そば」「寿司」「たたみ」も、そのほとんどが外国から材料がきていることから、鎖国をしたらどうなるかを考え、外国とのつきあいがなくなると私たちの生活は維持できなくなることを実感することができた。子どもたちは日本の課題は食糧

自給率の低さだけではないことが分かり、外国と良好な関係を築いていくことの大切さに気付くことができた。

(3) 実際に国と国をつないでいるのは、資金や物の提供よりも人と人とのつながりや信頼

ナミビアで国際協力をしている日本の人々は、言葉や考え方などが違う現地の人々と共に様々な課題に向き合っていた。そして、その課題一つ一つを乗り越えていく過程において、お互いが信頼関係で結ばれていく様子がよく分かった。彼らはいわば日本の代表者であり、ナミビアの人々から日本という国を信頼してもらうきっかけになっているようであった。国と国がつながるには、まず人と人がつながってお互いを理解し、信頼し合うことが大切だということを学び、社会の授業やアクティビティ3・4に活かした。

6年生社会「世界の未来と日本の役割」では、外国の様々な課題について学習する場面で、地域の先輩でもありJICA南スーダン事務所で国際協力の仕事をされている山根誠氏とオンラインでつないで話を聞いた。国の困難な課題一つ一つに対して、現地の人に寄りそいながら丁寧な協力活動を行っていることがよく分かった。



単元の終わりには、世界の課題について①日本として、②自分（個人）として、今できることと、将来できること・やってみたいことについて考え、遠い世界のことを自分事として考えることができた。子どもたちが、外国で活躍する日本人について興味をもったところでアクティビティ3を行った。

日本人が外国へ、しかも旅行ではなく仕事で多くの人が移住していたことに、子どもたちは驚いているようであった。また、コンビニエンスストアやファミリーレストランで見かける「ミックスプレート」が、日本人移住者のお弁当がきっかけで新しくできた文化であることにも驚いていた。移住先の国で、異なる文化背景を持つ人と交流をすることによって、その地域の社会・経済・文化の発展につながることを理解することができた。

次に、地域のゲストティーチャーを招き、アクティビティ4をアレンジして全校生を対象に授業を行った。子どもたちはアクティビティ1の授業を受けたり、校内のアフリカコーナーで現地の物を見て触る体験をしたりしているので、遠いアフリカに対しては身近に感じるようになってきている。しかし、東南アジアについては、その国々の人を町でよく見かけているわりには知っていることが少ない。そこで、東南アジアを身近に感じてもらうために、教師が旅行したときの体験談から「楽しかったプラスの面」と「悲しかったり困ったりしたマイナス面」を考え、言葉や文化が違っているとどんなことが起きるのかを身近に感じられるようにした。



その後、地域のゲストティーチャーとして役場の人権推進室の方とやさしい日本語教室を運営している方から、自分たちの住んでいる地域に外国人が急増していることや、その人たちが日本での生活の中で感じていることなどを聞いた。

「外国人は全員英語ができると思わないで」「買い物やゴミ出しで分からないことがある」「やさしい日本語で話してほしい」「地域の行事に参加して日本の人と仲良くなりたい」



といったプラス面や、マイナス面を知ることができた。そして、そんな思いをもった外国の方々を学校に招いた交流を計画することにした。学年団ごとに分かれ、日本や身近な小豆島の情報紹介、やさしい日本語でできるゲームなどを考え、交流を行い、同じ地域に住む外国の方々と仲良くなりたいという意欲をもつことができた。

【授業実践をした上での感想・ふり返し】

教師海外研修での気づきを授業実践する中で、新しい発見をしたり、様々な立場に立って考えたり、これからの地域のあり方を創造したりしたことで、子どもたちと共に自身も成長することができたように思う。このような機会を頂いたことに深く感謝している。